

児童・生徒の想定外の応答に対処するための 基礎的活動としてのフラッシュ型教材の活用

—課題非従事行動への対処法に関する学部教育と

初任・若手期 OJT との連携に関する研究—

山田雅彦 (東京学芸大学)

1. 課題と問題意識

本研究の課題は、児童・生徒の想定外の応答への対処法を独習する方法を学ぶための具体的な実践例の一つとして、フラッシュ型教材の活用を報告し、その可能性と課題を検討することである。課題設定に至った現状認識は以下の通りである。

「学級崩壊」が社会問題化して二十年近く経過し、私語や不規則発言、内職、離席等、課題非従事行動(off-task behavior)への対処は教育実践上重要な課題となっている。

すでに1980年前後から、国内外で研究動向に若干の相違があるものの、課題非従事行動を低減・抑止する方法について多くの研究がなされている。海外では課題非従事行動対策に特化した教育プログラムの開発が活発に行われており、国内では学級経営や授業力の向上といった特段の問題が生じていない学級でも目指されるべき「万能薬」による対処が主流である。いずれにしても、課題非従事行動の低減が目指される一方で、実際に発生してしまった課題非従事行動をいかにして制止するか、という研究はほとんど行われていない。

特に、学部教育段階では、学生自身の関心が授業技術に集中していることや、教育実習中に課題非従事行動に対処する場面に遭遇す

る機会が乏しいことから、課題非従事行動への対処法について学ぶ機会が乏しい上に、その意義を理解することも困難である。その一方で、採用直後の任地はしばしば課題非従事行動が頻発する学校になるといわれる。そのため、課題非従事行動への対処はほとんど自己流で行わざるを得なくなる。

また、課題非従事行動への対処法に関する研究が緒に就いたばかりであるせいもあり、課題非従事行動を制止する際には「毅然とした対応(注意、叱責)」が素朴に推奨されることがある。しかし、「毅然とした対応」は、児童・生徒の教師に対する感情的な反発を招く恐れがあり、別の対処法と併用しないとより深刻なトラブルに発展するリスクをはらんでいる。現に我が国では、1988年、1998年の少なくとも2回、激昂した生徒による教師の刺殺事件が発生している。どちらも被害者は二十代の若手教師であり、「熱心な」指導をする教師だったと報じられている。このほか、文部科学省調べでは2010年度1年間で対教師暴力は8967件発生し、そのうち当該暴力行為により被害者が病院で治療した件数は1980件に及んでいる。このように、「熱心に」「毅然と」以外の方法で課題非従事行動を制止する方法の開発と、その方法による初任・

若手教師の課題非従事行動への対処力を向上させる教師教育カリキュラムの編成が喫緊の課題となっている。

2. 研究の経緯

発表者はこれまで、課題非従事行動を制止する方法として、課題非従事行動を一時的に容認し、時には積極的に助長するような介入を行うことで、課題非従事行動を円満に終息させる方法が教師の間で半ば無自覚のうちに生み出され、継承されてきたことを発見した。発表者はこの方法を「フォーカス（注目の対象）に応じる」と命名し、なぜ有効なのかを原理的に追究することで、この方法を教師が自覚的に採用し、継承する道を拓いた。さらに、学部学生対象の担当授業科目の授業内容の一環として、演劇的な手法を活用したワークショップ形式による「フォーカスに応じる」技術向上プログラムを試行してきた。

このワークショップは受講者にはおおむね好評だが、以下のような改善の余地を残している。

1. 演劇的な手法をベースにしているため、「劇嫌い」の学生には敷居が高い。
2. 演劇的なノウハウに注目が集まって話がそれることがある。
3. 指導者・助言者を含めて、いっしょに活動してくれる人が必要である。

これらの改善点を克服して、多忙な初任・若手期に継続的に独習できるプログラムを開発することは、プログラムに即効性が期待しにくいことも考慮する時、初任・若手期の教師教育の重要な課題の一つであり、その独習プログラムを教員養成課程で体験、習得しておくことは、初任・若手期を乗り切るために

有意義である。

発表者は、この条件を満たすプログラムを学校以外での教育・訓練プログラムを参考にして試作し、それをさらに講義中に模擬的に体験するためにフラッシュ型教材を使用したプログラムを試行した。このプログラムは、さしあたっては課題非従事行動全般ではなく、事前に想定していなかった授業中の発話への対処を想定したものである。想定されている発話には、私語や不規則発言、生徒指導場面での抗弁だけでなく、教材内容について真剣に考えるがゆえに授業者の想定を越えてしまった発話も含まれ、教育実習を控えた学生にもその意義が理解しやすい。想定外の事態に「頭が真っ白」にならないよう、また「通り一遍」ではない応答ができるように、プログラムは以下の四つの活動から成っている。

1. 提示される文字を音読する。
2. 提示される映像に映っているものの名前を声に出して言う。
3. 提示される映像に映っているものの第一印象を声に出して言う。
4. 提示される映像に映っているものについて第一印象以外の印象、通称「じゃないこと」を声に出して言う。

本発表では、このプログラムとそれに続く独習プログラムの体験者の報告をもとに、このようなプログラムの必要性・可能性と課題について検討する。

謝辞

本発表は、科学研究費助成事業（基盤研究(C)「課題非従事行動への対処法に関する学部教育と初任・若手期OJTとの連携に関する研究(15K04213)」により助成を受けました。